

M-GTA 研究会 News Letter No. 65

編集・発行：M-GTA 研究会事務局（立教大学社会学部木下研究室）

メーリングリストのアドレス：grounded@ml.rikkyo.ac.jp

研究会のホームページ：<http://m-gta.jp/>

世話人：阿部正子、小倉啓子、木下康仁、小嶋章吾、坂本智代枝、佐川佳南枝、竹下浩、
塚原節子、都丸けい子、林葉子、水戸美津子、三輪久美子、山崎浩司（五十音順）

<目次>

| | | |
|-----------------|---|----|
| ◇第 63 回定例研究会の報告 | … | 1 |
| 【第 1 報告】 | … | 2 |
| 【第 2 報告】 | … | 11 |
| 【第 3 報告】 | … | 25 |
| ◇編集後記 | … | 38 |

◇第 63 回定例研究会の報告

【日時】2013 年 3 月 2 日(土) 13:00～18:00

【場所】立教大学(池袋キャンパス)、14 号館 D401 教室

【出席者】95 名（会員 75 名 非会員 20 名）

青木 彩香（立教企画）・赤畑 淳（立教大学）・朝倉 京子（東北大学）・浅野 真紀子（筑波大学）・朝比奈 佳志子（東洋大学）・阿部 節子(大正大学)・阿部 正子（長野県看護大学）・網野 裕子（岡山県立大学）・安藤 晴美（山梨大学）・イ ギョンア（横浜国立大学）・池内 彰子（茨城キリスト教大学）・石川 尚美（茨城県日立保健所）・石渡 智恵美（共立女子短期大学）・伊藤 美千代（東京医療保健大学）・岩崎 美香（明治大学）・碓井 幸子（清泉女学院短期大学）・大澤 千恵子（淑徳大学）・大達 さな枝（すずかけヘルスケアホスピタル）・大場 実保子（大垣市民病院）・岡崎 千都世（名古屋市立大学）・沖本 克子（岡山県立大学）・

小倉 啓子（ヤマザキ学園大学）・刑部 万寿美（豊橋創造大学）・長田 尚子（清泉女学院短期大学）・小山 妙子（東京医科歯科大学）・梶原 はづき（立教大学）・門間 晶子（名古屋市立大学）・金子 幸恵（筑波大学）・鴨澤 小織（日本大学）・唐田 順子（西武文理大学）・川添 敏弘（ヤマザキ学園大学）・木下 康仁（立教大学）・久野 綾乃（埼玉県立大学）・倉田 貞美（浜松医科大学）・小嶋 章吾（国際医療福祉大学）・小林 敬子（大正大学）・斉藤 まさ子（新潟青陵大学）・坂本 智代枝（大正大学）・櫻井 清美（高崎健康福祉大学）・佐々木 竹美（順天堂大学）・雫 公子（立教大学）・白柳 聡美（浜松医科大学）・鈴江 智恵（日本福祉大学）・高橋 桂子（新潟大学）・高橋 由美子・高村 一葉（日本女子大学）・竹下 浩（ベネッセ）・武田 るい子（清泉女学院短期大学）・田中 満由美（山口大学）・谷口 正一郎（株式会社学研ホールディングス）・田村 朋子（立教大学）・丹野 ひろみ（桜美林大学）・寺崎 伸一（株式会社ジャパンケアサービス）・戸賀沢 亮子（富士見）・都丸 けい子（聖徳大学）・鳥居 千恵（聖隷クリストファー大学）・内藤 智義（豊橋創造大学）・中川 泉（茨城キリスト教大学）・長坂 沙紀（東北大学）・根本 愛子（一橋大学）・橋長 真紀子（横浜国立大学）・長谷川 真理子（青森県立保健大学）・畑中 大路（九州大学）・馬場 洋介（株式会社リクルートキャリアコンサルティング）・浜田 由実子（吹田市立片山中学校）・林 裕栄（埼玉県立大学）・林 葉子・原 理恵（純真学園大学）・原口 昌宏（（独）国立成育医療研究センター）・平松 万由子（三重大学）・福島 美幸（大阪市立総合医療センター）・藤永 直美（東京都リハビリテーション病院）・藤原 佑貴（科学警察研究所）・前田 和子（茨城キリスト教大学）・真砂 照美（広島国際大学）・松浦 恵美（名古屋銀行）・松澤 明美（茨城キリスト教大学）・松戸 宏予（佛教大学）・三滝 亜弥（東北大学）・宮城 純子（自治医科大学）・宮崎 貴久子（京都大学）・三輪 久美子（日本女子大学）・武藤 麻代（立教大学）・目黒 明子（一般社団法人プレワーク研究会）・矢島 正栄（群馬パース大学）・山崎 浩司（信州大学）・山本 かほる（茨城キリスト教大学）・山本 弘子（岡山市立市民病院）・吉澤 秀美（信州大学医学部付属病院）・吉田 千鶴子（豊橋創造大学）・吉田 ゆかり（札幌市立屯田北中学校）・吉田 由美（目白大学）・吉武 竜一（南山大学）・若山 嘉子（山口大学）・渡部 優子（獨協医科大学）

【研究発表 1】

「非行少年が、犯罪から離れた新たな生き方を見出していくプロセス」

藤原佑貴（科学警察研究所）

1 研究の背景

非行少年の再犯防止は、現在日本において喫緊の課題とされている。非行とは、20歳未満の者の行為であり、犯罪、触法行為（行為内容は犯罪と同じだが、行為者の年齢が14歳未満

であり、それゆえ刑罰の対象とならない)、そして虞犯(一種の危険未然防止措置の対象となる状態)の3つを包摂する概念である(安香, 2008)。一般刑法犯により検挙された少年のうち、再非行少年の占める割合(少年による一般刑法犯検挙人員に占める再非行少年の人員の比率)は、1998年から毎年上昇を続け、2011年には、少年の検挙人員の31.5%を占めるまでになっている(法務総合研究所, 2011)。このように再非行が深刻になりつつある中で、いかに再非行を防ぐかが重要であり、それが非行少年支援における中心課題となっている。

非行と呼ばれる行動を考えるためには、単純に社会規範の視点から逸脱とみなすのではなく、少年が生きていく中で非行が持つ意味を探る必要がある。藤原・辻河(2009)によると、非行という形での行動化は、自分に注目を集めたり、親や社会への不満を示すための行動、すなわち、生きていくうえで必要な行動であると考えられる。また、同じ事実に対しても、受け止め方や感じ方がそれぞれ個々に違っているため、その主観的な事実を把握することが必要であるという指摘もある(橋本, 2011)。ところが、これまでの非行研究の大半は、矯正施設内における質問紙を中心とした量的研究であり、非行少年が審判や処遇を有利にするため、研究調査に対して反応の歪曲をするという問題が指摘されている(那須・菅野, 2007)。

また、非行をせずに立ち直りに至るに過程や効果的な要因について、他者との相互作用や、それに伴う認知の変容などに焦点を当てていくことの必要性が指摘されている(近藤・岡本・白井・栃尾・河野・柏尾・小玉, 2008)。しかし、立ち直りに焦点を当てたこれまでの研究の多くは、矯正施設内での変化等を扱うに留まり、日本の非行少年が矯正施設を出た後に社会の中で実際にどういったプロセスで立ち直っていくのかを捉えられていない。

このことを踏まえ、修士論文では、少年院に入った経験があり、その後非行・犯罪から離れて社会で生活している成人前期の男性を対象に、面接調査を行った。ところがこの時には、様々な制約等により十分な分析が出来なかったため、貴重なデータが消化不良のまま残っている。以上の経緯から、現在はこのデータの犯罪から離れていく段階に焦点を当てて再分析に取り組んでおり、今回はその結果の一部を報告する。

2 M-GTAに適した研究であるかどうか

(1) 理論生成

前に述べたように、非行少年が社会の中で実際に犯罪から離れていく段階に焦点を当てた研究は見られていない。したがって、この現象を分析し、モデルを生成することが、今後の再非行防止のために必要である。

(2) プロセス性

少年院に入った非行少年が犯罪ではない新たな生き方を見出していく現象は、限定された範囲の集団の動的なプロセスを含んでいる。

(3) 社会的相互作用

非行に関する著名な理論の1つに社会的絆理論があることから分かるように、犯罪から離れていく上で、社会的相互作用は極めて大きな役割を果たす。犯罪ではない新たな生き方を見出していくプロセスは、非行少年が家族や友人、教師や職場の人々等、複数のソーシャルサポートと関わりながら、変容していくプロセスである。

(4) 現場での活用

(3)で挙げたような非行少年の周囲の人々が、非行少年に対して行う支援の方策に、つなげる可能性がある。

3 研究テーマ

本研究は、既にあるデータの再分析であり、研究テーマと分析テーマが同一であるため、次項で説明する。

4 分析テーマへの絞込み

まず、データを読み込む中で、非行少年は犯罪を止めようという後ろ向きの理由から犯罪をしなくなるというよりは、新たな生き方を見出していく中で、犯罪をしなくなっていくように感じられた。また、彼らは犯罪を中心とした生活を送りながらも、仕事等によって少しずつ自信をつけていく様子が見え取れ、「犯罪中心の生活から新たな生き方を見出していくプロセス」という分析テーマを設定した。

しかし、この分析テーマで分析を進めていくと、犯罪中心の生活がかなり注目されることとなり、新たな生き方を見出していくプロセスを十分に明確に出来ていなかった。また、物理的に犯罪中心の生活を送ることと、心理的に犯罪中心であることが必ずしもイコールではないことが明らかになってきた。

そこで、新たな生き方を見出していくプロセスをより綿密に描き出すため、分析テーマは、「犯罪から離れた新たな生き方を見出していくプロセス」とした。

5 データの範囲と収集法

(1) データの範囲(回収資料 表1参照)

少年院に入った経験があり、現在は非行・犯罪から離れて社会で生活している、成人前期の男性8名であった。参加者の年齢は22～35歳(平均27.63歳)、未婚と既婚が4名ずつで、全員が何らかの職業に就いていた。最後に少年院を出院してからの年数は、4年～15年(平均9.25年)であった。なお、全参加者が「非行エスカレート型」(非行キャリアを重ねていくタイプ)であり、「いきなり型」(非行歴がなく突然悪質な事件を起こすタイプ)のケースは含まれていなかった。

「非行経験のある成人」を、「少年院に入った経験がある成人」に限定した理由は、非行の深度の幅をある程度限定するため、及び少年院の中での他者との関わりについても扱うこと

を可能とするためである。参加者は、過去を振り返って語るという面接内容の性質上、記憶に古すぎずかつある程度時間が経っており客観的に語ることが可能であると考えられる、成人前期に限定した。「成人前期」については、白井(2011)の「20代から40代前後の頃」という定義に従った。また、法務総合研究所(2011)によると、2010年の少年による一般刑法犯検挙人員は、女子が20889名に対して男子が83286名と、全体の約8割を男子が占めており、この傾向は長年変わっていない。したがってこの研究の参加者は、非行少年の大半を占める男性とした。

なお、本発表においては、8名のうち3名の分析結果を報告する。

(2) データの収集法

半構造化面接法による個別面接調査を実施した。1人あたりの面接時間は1回につき平均1時間55分、面接は1人につき1〜3回であった。

以下のインタビューガイドをもとに、参加者に自由に語ってもらった。また、面接の最後に、自分に対する満足度の変遷について線での記入を求め、それに対する質問を行った。

インタビューガイド

- ① ライフコースの概要(転居、家族構成の変化、学歴、職歴、少年院歴等)について
- ② ライフコースにおける鍵となる出来事及び他者との関わりについて
- ③ ライフコースにおける自身の変容について

倫理的配慮

これまでの他者との関わりと内面の変化について話を伺いたいという趣旨を予め伝え、同意の得られた者に、面接調査を行った。面接開始時に、改めて本研究の主旨及び具体的方法を文章及び口頭で説明した。それに加え、面接内容の録音、研究への任意参加、不同意による不利益は生じないこと、同意は随時撤回可能なこと、プライバシーと匿名性の保護、結果の研究使用等についても、文章と口頭で説明を行った。その上で、全ての参加者から同意書への署名を得た。また本研究は、当時所属していた大学院の研究倫理審査委員会の承認を得て実施した。

調査期間

インタビューの実施時期は、2011年9月〜11月であった。

6 分析焦点者の設定

「少年院を経験した後に新たな生き方を見出した成人前期の男性」

7 分析ワークシート:概念生成例を挙げる(回収資料 表2〜5参照)

8 カテゴリー生成:カテゴリーグループ【内面の変化】の生成過程

カテゴリーグループ【内面の変化】において、概念の比較をどのように進めたかを、具体例を

あげて説明する。なお、【】はカテゴリーグループ、<>はカテゴリー、「」は概念を表す。

データを読む込む中で、犯罪をしながらも、気持ちが犯罪ではない生き方の方向にどのように向いていくのが重要であると感じた。そこで、「表社会で生活していく自信の獲得」「伸し上がり願望」が抽出された。「伸し上がり願望」の背景には「出来ないもどかしさ」がバネのように存在していた。そして、これらの概念が変化へのエネルギーとして心の中に積もっていることを表す、<エネルギー蓄積>が生成された。そのような状況の中で、どのような変化が生じたかに着目すると、「新たに始める決心」「不良としてのプライドの断念」が抽出された。両者は表裏一体の関係にあったことから、<転機>としてまとめた。<転機>を迎えた後、新たな生き方を見出していくまでの間には、「どん底からの基礎固め」「自分を悔い改める」「世界を広げる」「ハンディの克服」という概念が抽出された。これらは、新たな生き方をしていこうとする中で、自分で自分を変えていく作業であり、<自分改革>と表現した。そして、<自分改革>をしながらも、「やりたいこと探し」や「夢の実現を目指す」ことを行っており、更に必要があれば<自分改革>を行うことを繰り返していた。そこで、「やりたいこと探し」「夢の実現を目指す」を、過去や現在の自分を変化させる<自分改革>と対比させ、<未来志向化>と表現した。以上のように生成された4つのカテゴリー<エネルギー蓄積><転機><自分改革><未来志向化>から成るプロセスは、分析焦点者自身の内面が変化していくプロセスとして、【内面の変化】と表現した。

9 結果図(途中経過;回収資料 図1参照)

10 ストーリーライン

今後更にデータ数を増やして分析し、検討していく。

11 理論的メモ・ノートをどのようにつけたか。いつ、どのような着想、解釈的アイデアを得たか。

①理論的メモ

分析シートを作成し、新たな概念を生成する際に、対極例、類似例がどのような例であるかを考え、分析シート上の理論的メモに記載した。また、他の概念との関連性や、その概念に関するアイデアも同時に記した。

②理論的ノート

分析の当初から、生成した概念間の関係性を考え、図で表した。図として目で見える形にし、それを眺めることで、新たに気付くこともあった。ふとした瞬間にアイデアが浮かぶこともあるため、疑問やアイデアをいつでもノートに書き留められるようにした。理論的ノートは、カテゴリー生成や結果図の生成の際に、大いに役立った。

12 分析を振り返っての疑問点

①分析テーマが広すぎるのではないか

「犯罪から離れた新たな生き方を見出していくプロセス」という分析テーマに迷いがある。この分析テーマで語りを検討していくと、対極例として、犯罪中心の生き方に関わる語りが多く出てくるように感じられた。犯罪から離れた新たな生き方を見出していこうとして失敗し、犯罪中心の生き方に戻ることは実際にあるが、犯罪中心の生き方に至るプロセスは、今回の分析テーマと一致するものではない。分析テーマに照らして、どこまでが今回の分析に含まれるべきなのか、その線引きが難しく感じられた。このことは、分析テーマが広すぎるためではないかと考えた。

②ダイナミックな動きを十分に捉えられていないのではないか

概念からカテゴリーを生成する中で、ダイナミックな動きを捉えているというよりは、単に類似のものを集め、抽象化しているだけのように感じられた。それに加え、個人差が大きいいためなのか、直接関係性が繋がらない概念も多く、結果図がダイナミックな動きを表現出来ていないように思われる。

③概念名の集約度合が不十分ではないか

概念名が長く、十分にその内容を集約出来ていないように感じられる。類義語や連想語を呟いてみるが、なかなか短い言葉にまとまらない。結果として、概念名が説明的になってしまっている。

※本発表は、発表者が昨年度提出した修士論文のデータを再分析したものであり、分析データは修士論文作成の目的で大学院在学中に収集したものである。

【SV から】

- 1 既にM-GTAを用いて修論としてまとめたものと同じインタビューデータを使つての再分析ということなので、データ提供者との、今回の分析テーマに関してのやりとりが出来ないままのデータという限界がある。また、8名中3名のデータを用いた段階の発表という限界もある。そういった限界を持ちながらの発表である。
- 2 研究テーマと分析テーマが同一ということだが、修論でのテーマはどうだったのか。
- 3 少年院を退院した後の8人ということだが、退院後今に至るまで、再び犯罪をしないで来たということではなく、再度犯罪に走ったりという動きがあって、今は離れているということか。「犯罪から離れた新たな生き方」ということだが、離れっぱなしではなかったということか。
- 4 もう犯罪をしないという確信が持てる方々だということか。どういう点からそう感じるのか。そう感じるために、「犯罪から離れた新たな生き方」という過去形にしているのか。
- 5 今回の分析テーマに即したインタビューには必ずしもなっていないわけだが、具体的にどうい

問いかけをしたのか。

- 6 M-GTAを使って分析する際に、必要なデータが収集出来ているかがポイントの1つになる。今回の分析テーマから見ると、もっとこういうことを聞いておけば良かったということはあるか。
- 7 線を引いて満足度の変遷を記入してもらったということだが、これは退院後から今日までについてか。
- 8 分析テーマに表現されている内容は、今回 M-GTA を使って解明したい現象を言い表しているということと言えるか。
- 9 コアになりそうな概念は、最初に作った概念か。
- 10 現在研究途中であることを前提として、理論的メモのところに類似や対極が書いてあるが、結果図を見ると、類似例が別の概念になっている。あるいは対極と書いてある概念が別のところで独立していたりする。これはどういうことか。
- 11 類似例としているものが、1つの概念にしにくいということだった。8人からお聞きしたので1人1人は違うが、分析焦点者として考えた時に、非行から離れて新たな生活を組み立てていくプロセスの中で、1つの幅の範囲として文字通り類似例だと考えるならば、独立した概念を生成する方向ではなく、その幅を含めた概念の命名にする可能性を考えてみたのか。1人のデータ提供者ごとに概念を作るのではなく、少し幅を含めた概念名を考えにくかった面があったのか。
- 12 継続的な比較分析ということで、データから概念の案を検討するオープン化と、もう1度それでデータを見直していく収束化の作業は、丁寧に慎重に時間をかけて行う作業だが、それがもう少し出来るかもしれないという印象を受けた。違いを強調すると一緒には出来ないということになるが、1つの着目点やデータと1対1の関係で概念を作っていくわけではないということもある。今作っている概念名に込められた解釈の意味合いを大切にしながらも、少なくとも類似例として別の概念にしている物との関係を再検討して、概念の飽和化を図っていく可能性がもう少し残されている感じがする。
- 13 貴重なデータと意義のあるテーマなので、最初概念生成の部分からもう少し丁寧に始め直し、完成させて社会に還元できるようにして欲しい。

【フロアからのご質問・ご意見】

- 1 投稿論文に向けてということで、どういった専門系の雑誌に投稿しようと思っているのか。それによって、視点が変わってくることもあるかと思う。
- 2 研究時の、研究する人間としての立場はどういう立場だったのか。
- 3 専攻は何か。
- 4 一般的に社会的に好ましくない物、例えばアルコールやギャンブルから離れるということがあえる。犯罪とは違うけれども、それと共通するところはあるか。
- 5 心理学では、行動修正や学習理論があるが、それとの関連で考えたことはあるか。
- 6 今回得られたデータは、満足度に関するデータという理解で良いか。
- 7 このデータはいわゆるライフストーリーのようなものを聞かれたと思うので、まずはライフストー

リー法のような分析で、長いスパンの中でその人がどうやって生きてこられて、どういう風に犯罪から離れて今に至るのかという、その人のストーリーをまとめてはどうか。すぐ動きがあるものを M-GTA で分析して固めようとする、なかなか無理がある感じがする。M-GTA を用いるとすれば、その次の段階が良いのではないか。人とつながっていく時、犯罪から離れていく時のような狭い範囲の動きで大きな意義のある部分がデータの中で見えるのであれば、その辺に焦点化するのはどうか。

- 8 分析焦点者の相互作用相手は誰か。今回の対象が出所した時期の社会的背景等が、新たな生き方を見出していくプロセスに影響を与えたりはしていないだろうか。

【発表を終えての感想】

発表をさせていただくまでは、M-GTA について分からないことも多く、1 人手探り状態で分析を進めておりました。このまま進めて良いのかという疑問と不安を常に抱きつつも、インタビューに協力して下さった方々のことを考えると、前に進んで形にしなければいけないという思いが強くなりました。そうして何とかしなければいけないと思っていた矢先に、発表募集のお話をいただきました。分析が途中段階な上に、自分が理解出来ていないということは自分でもよく分かっておりましたので、手を挙げさせていただくことに恥ずかしさもあり、躊躇もしました。しかし、結論から言うと、発表して本当に良かったと思います。発表前から、発表中、休憩時間、発表後、懇親会、回収資料に至るまで、多くの皆様が温かいお言葉やアドバイスを下さり、進むべき方向性が見えてきたと同時に、大変励みになりました。私のような初学者や、1 人で分析に臨んでいる皆様は、もし分析について迷われているのであれば、ぜひ発表されることをお勧めしたいと思います。

発表を通して分かった最大のことは(まだ頭で分かったつもりになっているだけかもしれませんが)、いかに概念を生成するかということです。それまでは、データに着実に、そのダイナミクスを表現したいと思うあまりに、個人の違いが気になってしまい、類似例や対極例を 1 つの概念としてまとめられずにおりました。しかし発表によって、類似例と対極例を検討し、概念の飽和化を図っていくという基本を、改めてしっかりと確認することが出来ました。今後は、まずコアになりそうな部分に着目して概念を生成し、その関連から 1 つのカテゴリーを生成していくというように、再度 1 から着実に分析を行いたいと思います。またその際には、専門が心理学であるが故に心理的なものに注目してしまいがちな研究者としての自分を自覚し、「どうしてそうなったのか」を常に考え、プロセスをまとめていきたいと思います。

最後になりますが、まだ研究途中であり、拙い発表ではありながらも、貴重な発表の機会をいただきまして、本当にありがとうございました。SV をお引き受け下さいました小嶋先生には、発表資料を準備する段階から、何度もメールのやり取りをさせていただき、大変丁寧にかつ親身にご指導をいただきました。また、フロアの皆様方からも、様々なご意見やご指摘を賜りまして、とても勉強になりました。この場を借りて、心から感謝申し上げます。

【SVコメント】

小嶋章吾（国際医療福祉大学医療福祉学部）

はじめに

M-GTA 研究会の定例研究会では、既に研究をまとめた段階での研究発表と、これから研究に取り組もうとする構想段階における構想発表という2つのジャンルがあるが、本発表はそのいずれにも該当しない、いわば中間発表となっている点を前提にコメントしたい。というのは、データ提供者8人から得られたインタビューデータのうち、3人分についての分析を終えた段階での発表となっているからである。

1. 研究テーマの意義と M-GTA の適合性

非行及び再犯の増加とともに、非行少年に対する矯正施設退院後の支援のあり方への示唆を得たいという今日的、実践的な研究である。発表にもあるように、研究テーマの意義や M-GTA への適合性については十分に理解できる。

2. 分析テーマへの絞り込みとデータ収集法・範囲

発表者は、すでに修士論文において、同じインタビューデータをもとに M-GTA を用いた研究をまとめているが、今回の発表は分析テーマを変更して再分析を試みようとしているものである。分析テーマは修士論文では、「犯罪中心の生活から新たな生き方を見出していくプロセス」であったが、今回は「犯罪から離れた新たな生き方を見出していくプロセス」と変更されている。発表レジュメによれば、修士論文における分析テーマでは犯罪中心の生活に重点が置かれることになり、新たな生き方を見出していくプロセスについての分析の不十分性が指摘されている。すなわち分析テーマの絞り込みについては、インタビューデータのなかで新たな生き方を見出していくことに失敗し、犯罪中心の生き方に戻るといった語りが多く出てくるとして、発表レジュメのなかでは「分析テーマが広すぎるのではないか」との疑問を呈しておられる。だが、あらたな生き方を見出していくプロセスは必ずしも直線的に進行するものとは限らないであろうという現実をふまえるならば、分析テーマの絞り込みの問題というよりもむしろ、新たな生き方を見出していくという現象特性の一側面としてとらえてよいであろう。

なお、データ収集・範囲については、もともと今回とは異なる分析テーマのもとで設定したインタビューガイドにもとづいて収集したデータが用いられており、今回の分析テーマに沿ったデータ提供者とのインタラクティブ性を確保することや、追加データを収集することはできないという限界があることも前提としておく必要があるだろう。

3. 分析焦点者の設定

少年院の退院後一定の期間を経て社会生活を営んでいるデータ提供者へのインタビューにより収集した希少なデータを用いておられるが、分析焦点者として「少年院を経験した後、新たな生き方を見出した成人前期の男性」を設定されているのは妥当であろう。

4. 概念及びカテゴリー生成

中間発表であるため、スーパービジョンの対象範囲はここまでとなるが、発表者自身、発表レジュメでは、概念については、「概念名が長く、十分にその内容を集約できていない」「結果として、概念名が説明的になっている」とされ、カテゴリーについては、「単に類似のものを集め、抽象化しているだけのように感じられる」とされている。

提示されている概念やカテゴリーについて、そのため、事前のメールでのやりとりや当日のやりとりにおいては、コアになりそうな概念やカテゴリーについて限定して検討することとしたが、次のような点が気になった。

1) 概念名

発表者自身の指摘のように概念名が概して長く、センテンスとなっているものが多い。

2) 概念の多産性

8人のデータ提供者のうち、3人のデータを分析した時点で既に、40を超えるワークシートが作成されている。

3) 概念の多重性

M-GTAにおいては基本的に、概念とカテゴリーが生成されるが、本発表においては、概念、サブカテゴリー、カテゴリー、カテゴリーグループという4段階で設定されている。おわりに

これらの諸点をふまえてデータを検討してみると、例えば、サブカテゴリーとされている中に位置付けられている概念が現象の幅を示しており、むしろサブカテゴリーが示す内容がM-GTAという概念に相当するのではないかと思われるものも見られた。概念を多産するのではなく、1つひとつのワークシートを丁寧に作成していく、つまり類似例や対極例を十分に検討することによって理論的飽和化に至る感触を得ることができた。

分析の途上であることは幸いであった。既に生成されている40余の概念にこだわらず、M-GTAにおいて中核的な作業であるワークシートの作成を丁寧にし直されることも選択のひとつではないかと思われた。

研究テーマの意義とデータの希少性を鑑み、なおかつ修士論文の反省点をふまえての再分析であるという問題意識をふまえ、ぜひとも完遂していただきたい研究である。今後、研究発表の機会があることを強く期待したい。

【研究発表2】

「卒業生の初期キャリア形成を支援する短大教育のあり方」

Toward a Reform of the Curriculum to Assist the College Graduates' Career Development

長田尚子（清泉女学院短期大学国際コミュニケーション科）

Naoko OSADA (Seisen Jogakuin College International Communication Department)

I 本学科における卒業生調査

1. 研究の背景

本学科では、学生のキャリア形成支援を念頭に、カリキュラムと授業形態の改革が継続的に進められ、2010 年度から新カリキュラムでの学科運営が始まった。その過程における 2 つの学科共同研究、「学生のコミュニケーション力養成カリキュラムとしての学外活動の効果的運用の研究—プロジェクト型学習の開発、地域団体との連携、学内外行事への企画参加などを通して」と「キャリア教育研究—長野地域の企業に送りこむべき学生像、学生のキャリア基礎力養成の方法、そして望ましいキャリア形成支援のあり方について」を通じて、カリキュラム改善の成果を評価する必要性が認識されるようになった。

新カリキュラムの成果を検討し、継続的な改善に繋げるためには、個別授業の分析・評価(例：長田・村田, 2011)の積み重ねはもとより、卒業後も含めた多角的な検討が必要となる。また、その調査方法自体を確立するための検討も欠かせない。そこで、新カリキュラムへの完全移行を前に卒業生調査を開始し、短大教育についての卒業生の意識の把握、初期キャリア形成時期の職場での状況の把握、カリキュラム評価のための卒業生調査の方法の検討を段階的に進めることとなった。

2. 本学科における卒業生調査の概要

卒業生調査は 2008 年から 2010 年の 3 年間に卒業した 285 名を対象に、2011 年 2 月から 3 月に郵送法で行われ、有効回収率は 20% (57 名) であった。調査票は、短期大学コンソーシアム九州による調査項目を参考に構成した。調査票に基づく回答の集計データからは、本学科の教育内容に対して卒業生が一定の評価を与えていることが考察された(武田・長田・村田, 2012)。一方、卒業生がそれぞれの職場でどのような行動特性を発揮しているのか、それは新カリキュラムが目指しているものに相当するのか、そしてさらに、短大卒業生が初期キャリアを形成していく上で望ましい方向で発揮できているのか等について、具体的な把握をすることは難しい。このようなことから、調査票によるデータを補完する形で、インタビューを企画・実施することとなった。調査票への回答があった卒業生に対し、業種別に 2、3 名ずつインタビューを依頼し、業務内容、働き方、人間関係、短大教育の効用等についてフォーカスインタビューを実施し、12 名の回答を得た。

3. 短大卒業生のキャリア形成

本学科卒業生が就く職業は多様化の傾向にあるが、依然、事務業務を中心とした就業環境にある卒業生は多い。そのため、女性事務職のキャリア形成の特徴を把握しておくことは、女子短大卒業生の初期キャリア形成を支援するための参考となる。貿易事務における女性事務職のキャリア形成を分析した小玉(2004)は、女性が担当する事務は補助的性格が強いといわれるが、難易度が高いものまで多岐にわたり、現場におけるインフォーマルなキャリア形成がなされてきていること、その結果、キャリア形成に関して個人差が大きいことを指摘している。浅海(1997)は、女性事務職から営業職に向けてのキャリア形成が成功した要因として、上司の支援や職場の環境とともに、事務職として業務知識や商品知識を確実に身につけておく姿勢、ジョブ・エンリッチメントの姿勢、自己啓発の姿勢等を挙

げている。また、筒井(2001)は、補助的な業務に従事する若年女性が、より難しい仕事に挑戦するためには自己有能感が必要であり、その自己有能感を高めるためには仕事経験の拡大が必要であると指摘している。

本学科卒業生も、補助的職務からスタートし、フォーマルな育成がなされない場合もある中、多様なキャリアをたどることが想定される。自ら初期キャリアを築き、発展しているような行動特性を備えること、またそれを職場で発揮できることが望まれる。

4. 卒業生インタビューの内容と方法

以上示した先行研究の指摘を整理すると、補助的な立場として仕事に参加する中でも、ビジネスの流れを意識し、自らの業務知識や業務の幅を拡大していく姿勢が、キャリア形成の観点から重要であると示唆される。インタビューでは、採用面接等で用いられるコンピテンシー面接の方法を参考に(川上・齋藤, 2005)、これらの姿勢が行動として発揮されているかどうかを、具体的な文脈とともに詳細に引き出し確認することとした。あわせて、短大教育の効用について、具体的な意見を求める質問も含めた。

主な質問項目は、「仕事の場面で何か工夫していることはありますか」「職場で役に立ったり、褒められたりした経験はありますか」「職場でとても大変だったり苦しかった経験はありますか」「大変な環境を乗り越えるためにどんな努力をしましたか」「職場での人間関係について教えてください」「職場で何か悩みがあったら誰に相談しますか」「職場で役に立っている授業はありますか」「もう少しこんなことを学んでおけばよかったということはあるですか」等である。インタビューは報告者を含む本学科教員が行い、許可を得た上でICレコーダーに録音し、書き起こしたデータをもとに分析を進めた。

5. 分析の経過

インタビューの分析については、次の2点を想定した。第一は、調査データで卒業生が短大教育に対して一定の評価をしていることがわかったが、具体的にどう評価しているのかという点である。この点については、武田・長田(印刷中)において、「卒業生は短大教育をどのように評価しているのか」という観点で別途分析を行い、カリキュラム改善への示唆を得るとともに、調査票に加えてインタビューを行うことの重要性を明らかにした。第二に、そもそも卒業生が職場でどのように働いているのかを具体的に知る必要がある。つまり、仕事にどの科目が役だっているのかを直接聞くだけではなく、職場に慣れ、徐々に難しい仕事に取り組んでいく初期キャリア形成プロセスから、カリキュラム改善や評価への示唆を得られるのではないかという切り口である。本報告は、この後者についての分析経過となる。

II M-GTAによる分析の経過

前章の最後に示した2つの切り口の後者の部分は、当初よりグラウンデッド・セオリー・アプローチによって分析することを想定していた。しかしながら、実際どのように分析を展開していくべきかについては、試行錯誤があった。M-GTAによる分析として発展している内容について、以下に報告する。

1. M-GTAに適した研究であるかどうか

短大では、学習した知識・能力・技能を卒業生が業務に活かしているのかという観点から、教育成果を把握することは欠かせない。しかし、業務にある程度精通しないと、短大教育を正しく評価することは難しいだろう。熟達化研究では、業務で一人前になるには、最低でも3～5年程度必要とされる（松尾，2006）。それまでには、実務経験や研修を重ねることになり、短大での学習内容のみを問うことは難しくなる。認知科学では、学習したことを別の場面での問題解決に使う転移に関する研究が長く行われているが、現実の学習場面において転移元と転移先を特定することは難しいとされる（白水・三宅，2009）。

学習したことでどの知識が増え、それがどう役立ったのか、あるいは、卒業後どの時期に何を評価すれば教育成果が把握できるのか、といった問いを中心とする検討には困難が伴う。短大2年間のアウトカムがどこでどう評価できるのかではなく、将来よりよいアウトカムにつながる理想的なプロセスを少なくとも短大2年間で提供できているか、よりよいアウトカムにつながるプロセスを自ら生み出す力を学生が身につけることを支援できているか、という検証が必要なのではないだろうか。

以上のことから、卒業生が就職先の職場でキャリアアップしていくために、よりよいプロセスを生み出せているのか、職場での初期キャリア形成時期に、どのような行動がとれているのかを具体的に検討することが重要だと考えられる。そこで本研究では、女子短大卒業生が職場に定着しキャリアを形成していく中で、どのような行動とり、どのようなプロセスを経て、就業継続への意欲を持ち得ているのかを、インタビューデータから明らかにすることとした。

このような目的を持つ本研究は、本学卒業生と職場の様々な人々との間の社会的相互作用を扱うものであること、またその社会的相互作用の中で卒業生が職場における初期キャリアを形成していく状況にプロセス特性があることからM-GTAに適した研究であるといえる。具体的には以下の4点をあげることができる。

- ① 職場において業務を遂行することは、基本的に社会的相互作用であること。卒業生と職場の上司、卒業生と職場の同僚、卒業生とお客様など多様な相互作用が想定できる。
- ② 事務職や販売職としてキャリアをスタートする女子の短大卒業生は、職場の対人関係を考慮した潤滑油的な役回りも期待されながら、幅広い業務を担当する。このような業務形態はヒューマンサービス領域として捉えることができる。
- ③ 卒業生が初期キャリアを形成していく過程、すなわち、職場に慣れ安定的に就業を継続していく状況に至る過程は、プロセス的な性格を持つといえる。
- ④ 卒業生の初期キャリア形成過程を捉えた結果、そのプロセスの展開を促進したり、展開の各段階を深めたりすることが、短大のカリキュラムの中で可能なのかという考察に進むことができる。それ以前に、卒業生が職場で実際どのように働いているのかを具体的に記述することができる。

2. 研究テーマ

研究テーマは、「卒業生の初期キャリア形成を支援する短大教育のあり方」としている。短大では、短期大学設置基準に「学科に係る専門の学芸を教授し、職業又は實際生活に必要な能力を育成する（後略）」とあるように、実際の職業を想定したカリキュラムが従来から展開されている。学校基本調査によれば、平成21年3月の長野県の短期大学への現役進学率は10.6%で、全国一高い率となっており、継続的なキャリア教育の改善とその評価は欠かせない。また、本研究のテーマは、短大に限らず、若年女性のキャリア形成を意識したカリキュラム改善を検討している高等教育機関全般に共通するものと考えられる。

3. 分析テーマへの絞り込み

清泉女学院短期大学国際コミュニケーション科の「卒業生が就職先の企業や団体においてキャリアを形成していく初期の過程」を分析テーマとしている。2011年度に実施した卒業生調査に関しての研究は以下のように発展してきている。本報告はD)にあたる。

A) 卒業生調査における調査票データの分析と考察（武田・長田・村田, 2012）:

卒業生に郵送した調査票の分析と考察を行った。考察の中で、カリキュラム改善に向けた具体的な示唆を得るためには、職場での業務の様子把握、キャリア形成に向けた行動特性の把握、短大教育に対する卒業生の意識の把握等のために、インタビューが必要であることを提起した。

B) インタビューを通じた短大教育の評価の在り方の考察（長田・武田・村田, 2012 として学会発表）:

以上の経緯から卒業生インタビューを行ったデータを用いて、分析方針の検討を行った。

C) 卒業生からみた短大教育の効用（長田・武田, 印刷中）:

短大教育に対する卒業生の評価について、調査票では把握できない部分に焦点をあて、その内容を質的にまとめるとともに、インタビューすることの重要性を考察した。短大教育への効用については社会的相互作用やプロセス性があるものではないため、M-GTAは用いていない。

D) 本学科の卒業生が就職先の企業や団体においてキャリアを形成していく初期の過程（本発表）:

カリキュラム改善の結果として導入されたプロジェクト型の学習活動の成果は、活動を通じて得た行動の方法や考え方を職場でも発揮できているか、あるいはその逆に、職場で必要となる行動を促進するような経験を授業で与えることができていたか、といった観点で考察することができると想定している。今回は、その元となる分析として、卒業生の職場における行動プロセスをM-GTAによって検討していく。

M-GTA としての分析テーマへの絞り込みの中で、テーマに含まれる概念の定義を行った。まず「キャリア」という言葉である。「キャリア」の定義は多様だ。たとえば文部科学省では、「個々人が生涯にわたって遂行する様々な立場や役割の連鎖及びその過程における自

己と働くこととの関係付けや価値付けの累積」と定義している。本研究が対象とする就職後 3 年目までの卒業生に関しては、職務経験に特化して考えてもよいだろう。仕事を中心にキャリアデザインを考察している大久保(2006)は、「キャリア」には客観的側面と主観的側面があるとしている。前者は職務経歴、すなわち職場での経験である。そして後者は、仕事上での自己イメージやアイデンティティである。本研究では、「キャリア」を、短大卒業生が就職先で積んでいく職務経歴であり、仕事に対する自己イメージであると定義する。

では、そのような「キャリアを形成する」ということはどう考えればよいのだろうか。前述の女性事務職のキャリアに関する諸研究の中でも触れられているように、短大卒業生はフォーマルな研修を受ける機会が少なく、極めて多様な環境で働いていく。その中で「キャリア形成」とは、職場において自分自身が主体的に行動し、振り返り、経験と仕事に関する自己イメージを蓄積していくことであるといえる。そのごく最初の段階が入社 3 年目となる。入社 3 年目までの早期離職が問題になる中、本研究では、短大卒業生が入社 3 年目までに、主体的に「キャリア形成」できる素地を作り、現在取り組んでいる仕事に熟達し安定的に働けるようになることが大切であると考えている。

以上から、「初期キャリア形成」がなされたという状態は、企業あるいは団体に継続的に勤務し明確な継続の意思を持っていること、あるいは業務に関してその先の展望を持っていることとして考えることができる。分析の結果図の中では、就職後の様々な試行錯誤や紆余曲折はあったが、まだしばらく働きたいという考えを持つに至る過程を記述することになる。卒業後何年目までを対象にするかという点については、次項でも説明するが、短大を出てその仕事に熟達し安定的に働くようになるまでの過程をとらえることに主眼を置いた。具体的には、入社 1 年目から 3 年目程度までを対象とする予定とした。

4. データの収集法と範囲

インタビュー調査は、2011 年の 2 月から 3 月にかけて実施したアンケート調査に対して回答のあった 57 名の卒業生の中から、業種別（金融、総務事務、接客・販売、専門系、製造）に分け 2、3 名ずつに依頼して、業務内容、困難への対応力、短大教育の効用などについて半構造化インタビューを実施し 12 名の回答を得た。インタビューは報告者ら本学科の教員が担当した。インタビューデータは個人を特定できない形で取り扱うことを条件に許可を得た上で録音し、その後書き起こしを行った。インタビュー形式は個人あるいはグループで、1 回のインタビューは 60～90 分程度であった。分析には 2008 年 3 月～2010 年 3 月までの卒業生で、企業あるいは組織に就職して仕事を続けている 10 名を対象として分析することとした。

理論的飽和化も意識して、本学科卒業生の多くが就職する業界と職種の系統からデータ収集できるように考慮した。また、業務に熟達するまでの約 3 年をとらえることで、キャリア形成の初期の過程とすることができると考えた。ただし、入社 3 年目の卒業生が、入社 1 年目、2 年目のことを回顧的に振り返る視点と、入社 1 年目の卒業生がその年の活動に言及するのとでは後者の方がより現実的な状況を反映している場合もありうる。そこで、

入社1年目、2年目の卒業生も同様に分析する必要があると考えた。インタビュー実施にあたって、報告者らがガイド質問をあらかじめ設定した。質問は、本資料Ⅰの4に示した通りである。インタビュー担当者はこのガイド質問を手がかりに話をはじめ、コンピテンシー面接の方法を参考に（川上・齋藤, 2005）、卒業生の発言にあわせてより深く具体的な発言を引き出す質問をするよう心掛けた。コンピテンシー面接は就職面接等で用いられる考え方で、過去の行動を事実として引き出すことに優れているとされる。たとえば、「職場で苦しかった経験はありますか」という問いの答えを引き出した後にその経験に関しての卒業生の具体的な行動がわかるように掘り下げていく質問を続けていく。たとえば「その場面であなとは仕事上どのような役割をもっていましたか」「なぜその仕事をあなたが担当するようになったのですか」「その時上司や先輩に何か相談しましたか」「その状況を克服するために何をしましたか」といった質問を継続的に展開していく。

5. 分析焦点者の設定

分析焦点者は「女子短大卒業後就職中の者」とする。本研究では特に事務職に限定せず、本学の卒業生が就く主な職種を対象として考えていく。入社3年目までの初期キャリア形成においては、事務職であっても販売職であっても、通底する行動特性があるのではないかと考えている。ただ、厳しい雇用情勢の中、事務職の仕事自体も多様化しているが、依然として短大卒業生の多くが事務職と呼称される立場で就業している。そこで本研究では、上表の2008年3月卒業の事務職を行う卒業生から分析を開始することとした。その後は、最近就職者が増えている販売職について分析を進め、個人単位で行ったインタビューを用いて一通り概念生成を行うこととした。それをもとに、グループで実施したインタビューを追加的に分析していくことで、概念生成の状況を確認し、その範囲で概念が生成されなくなったことをもって、カテゴリーの検討に進んだ。

6. 分析ワークシート（概念生成例）＜＜別途回収資料＞＞

概念の生成に関しては、入社3年目の事務職の卒業生からはじめ、継続して個人でインタビューを行ったデータに展開した。そして最後にグループで実施したインタビューに進んだ。グループ形式の場合、卒業生同士が直接意見交換することは避け、個々の設問に対して、インタビューを担当する教員と一対一の形式で答えてもらうよう配慮した。他者の回答内容を聞いていることから、相互の回答内容に影響があることも想定しておかねばならない。そこで、分析に際しては、個人形式のインタビューデータを用いて分析の骨格となる概念生成を進め、それに対しての対極例の検討や比較検討を深めるためにグループ形式のデータを用いるという方針で進めた。なお、作業に際してはMAXQDAを用いた。

グループ形式のインタビューで得たデータには、それまでの分析にない業界（金融機関）と職種（技術職）のデータがあったが、新しいカテゴリーは生成されなかった。また、当初想定していた職種や卒業後の経過年数による違いについては、大きなものは見られなかった。経過年数の違いについては【継続学習への意欲】という概念は、入社1年目のデータには対応部分がない、【顧客にあった対応の工夫】という概念には、入社1年目の事務職

のデータには対応部分がない、などの傾向が見られた。

7. カテゴリー生成 <<別途回収資料>>

以下の表（回収資料）に、概念から生成したカテゴリーを一覧として示す。各概念を相互に比較しながら、短大を卒業したばかりの若い女性がどのようにキャリア形成していくのか、キャリア形成するためにはどのような工夫をしているのか、という観点で考察を進めた。22 の概念から 8 つのカテゴリーが生成された。

各概念を相互に比較する中で、仕事に慣れていくためにとった行動に関する概念が複数あることがみえてきた。これらは【職場環境や業務への適応】カテゴリーとしてまとめた。それに関係し、新入社員という立場は乗り越え、任されて働くという文脈における仕事への取り組み姿勢に関する概念がまとまってきた。これらは【仕事に対する責任感や工夫】としてまとめた。また、自分が働いていく中で目指していくべきことを明確にするという行動も見られた。これらは【視野の拡大と目標設定】としてまとめた。以上に関してはさらに上位のカテゴリーとして、【職場に慣れる初期段階の行動】としてまとめた。これについては、結果図に示している。また、以上の行動と並行して、多様なコミュニケーションを円滑に遂行しようとする行動が確認された。コミュニケーションの相手ごとに【同僚とのコミュニケーション】、【上司とのコミュニケーション】、【職場外でのコミュニケーション】としてまとめた。これらはさらに上位のカテゴリーとして、【周囲との関係構築】としてまとめ結果図に記載した。さらに、以上の行動の中から、責任ある仕事を任されたり、仕事への自信を得たりしていく状況が立ち上がり、【仕事への挑戦と自信】というカテゴリーにまとめた。そして最後に就業継続への意思へとつながっていくものとして【現状への納得感と将来展望】というカテゴリーができた。

8. 結果図 <<別途回収資料>>

結果図のカテゴリーの関係については、2 つの上位カテゴリー【職場に慣れる初期段階の行動】と【周囲との関係構築】が立ち上がったところで、その両者に並行的な関係（つまり、それらの行動を卒業生が並行的にとっていること）が見られた。また、以上 2 つの上位カテゴリーから結果として行動が導かれる形で【仕事への挑戦と自信】、さらに【現状への納得感と将来展望】が行動としてつながってくる様子を現わした。

9. ストーリーライン 【】がカテゴリー、<>は概念をあらわす

清泉女学院短期大学国際コミュニケーション科の卒業生は次のようなプロセスを経て、卒業後約 3 年の間に初期キャリアを形成していく。

就職後まず【職場環境や業務への適応】のための努力をする時期が訪れる。業務に不慣れなことや周囲との関係からくる大きな試練の中でも懸命に働き続け、後で<仕事に慣れるまでの努力>であったと振り返ることができるような経験をする。そのような状況におかれながらも、<先輩から学び>自分を高めたり、<先輩への相談>を適切に行ったりしながら、環境への適応を深めていく。さらに、業務のニーズに応じて<勤務時間外での学習>を行うこともある。一方、以上の行動とは別に、社会人として仕事を任された限り【仕

事に対する責任感や工夫】を怠たらず、職場の信頼を得ていく行動も見受けられる。特に＜仕事の質へのこだわり＞は強く、本学の卒業生が多くの職場において責任ある仕事をまかされていることがわかる、また、顧客への対応が必要な業務では、＜顧客にあった対応の工夫＞を自ら行い仕事の質を高める行動をとっている。さらにその行動を深め、業務を通じて＜顧客との信頼関係の構築＞し、顧客を支援していくことを自らの仕事の動機づけとしている状況もみられる。

【職場環境や業務への適応】と【仕事に対する責任感や工夫】は、業務における【視野の拡大と目標設定】につながっていく。この3つは順を追った行動として展開される場合もあれば、その職場の状況によって、多様な展開となる場合もある。【視野の拡大と目標設定】においては、＜業務理解の拡大＞という行動が見られる。これは、自らの業務を目の前の単なる事象と捉えずに、組織の中の仕事の流れとして捉えたり、他部門との関係として捉えたりしていく姿勢として現れる。また＜業務目標の明確化＞を上司の指示あるいは自ら行い、日々の業務の目当てとして業務の推進に役立てようとする行動もある。さらには、日常の業務を深め、目標に到達するために職場の援助によって資格取得のための学習を始め、＜資格取得への意欲＞を持ち続けながら働いていく。

以上【職場環境や業務への適応】【仕事に対する責任感や工夫】【視野の拡大と目標設定】の3つは、【職場に慣れる初期段階の行動】といえる。これらの行動と並行的に行われるのが【周囲との関係構築】である。【職場に慣れる初期段階の行動】だけに偏った場合、＜仕事へのこだわり＞が強すぎて孤立したり、職場での幅広いコミュニケーションが取れずに、失敗したときに周囲からの支援が受けられなくなることも危惧される。また【周囲との関係構築】だけでは、仕事の質が上がらない。

【周囲との関係構築】としては、まず【同僚とのコミュニケーション】があげられる。短大卒業生の就職先にはまったく同学年の同僚がいることは少ないが、近くの部署で同じ立場で働く4年制大学の卒業生やパートタイム社員などに対してきめ細かな配慮を怠らない姿勢を示しながら、＜職場でのコミュニケーションへの配慮＞を行っている。また、＜仕事仲間への気遣いや助け合い＞にも日頃から注意を払っていく。その一方で【上司とのコミュニケーション】も大切にしていける。直接仕事の指示を受け、報告を上げる関係として＜上司との良好な関係の構築＞や適切なタイミングでの＜業務報告や振り返り＞を通じたコミュニケーションも大切にしている。以上2つの同僚と上司とのコミュニケーションが円滑にできることは、仕事の質を高めることにも大いに役立っているだろう。しかし、これだけに注意を払っていることは、卒業生自身の疲弊にもつながりかねない。そのため【職場外でのコミュニケーション】を保っている様子も見受けられる。＜友人との会話や気分転換＞と＜家族や恩師への相談＞は、職場で仲間が少ない短大卒業生にとっては、貴重な機会になっている。

以上示した【職場に慣れる初期段階の行動】と【周囲との関係構築】から導出される形で【仕事への挑戦と自信】が行動として現れてくる。たとえば【仕事に対する責任感や工

夫】を示し、【上司とのコミュニケーション】を効果的に保てることから＜責任ある仕事や大きな仕事の担当＞の機会を得ることが可能となる。それによって＜仕事への自信＞を得て、＜自らの成長の実感＞も得られるようになる。

そして、初期キャリアを形成する過程の目指すべき到達点として【現状への納得感と将来展望】を持てるようになってくる。この段階では＜当初の希望と現在の仕事との関係付け＞を前向きに行えるようになり、就職活動を始めたころの志望と現在の勤務先や職種は異なるが、結局今の仕事が自分に合っていると認識できるようになる。そこから＜就業継続の検討と意欲＞が湧いてくることになり、またそれを後押しするものとして＜継続学習への意欲＞も持つようになる。

以上が国際コミュニケーション科の卒業生が入社 3 年目までに経験し、自らの行動に反映し、キャリア形成へとつなげていく過程となる。

＜SV(木下先生)からの質問とコメント＞

Q1. 概念生成はどのように進めたのか、データのどこに着目したのか？

A1. インタビューを読み込みながら、卒業生が職場で働くということはどういうことかを念頭に、具体的な行動を表す部分を手がかりにした。分析の開始時点で、データが十分かを確認するために通し読みしながら、行動を表す部分に着目していった。

Q2. なぜ行動に着目したのか？

A2. 分析テーマとして、卒業生が職場でどのような行動をとりながら初期キャリアを形成しているのか？に着目しているから。

Q3. 「仕事に慣れるまでの努力」という概念の類似例の中で、どれが一番ポイントになりそうか？データのどこに着目したのか？また、そこから概念名に至る検討プロセスは？

A3. 最初に分析を始めた入社 3 年目（2008 年の卒業生）のインタビューの中に、大変だったけれども今ではその状況から解き放たれ、大変さを対象化し自分の経験として振り返っていると考えられる部分が複数個所あったので、そこを手がかりとした。理論的メモに書いているように、個々人で大変さの捉え方はいろいろである。短大生の初期キャリア形成時期は多様であり、仕事そのもの、職場環境、上司、同僚、仕事のわからなさ等、個人によって大変とを感じるものは様々である。この状況を、少し高い立場で自分を振り返っている様子を、目的（仕事に慣れる）に向けて努力することとしてまとめた。

コメント 1. 短大生の仕事は雑多のか？四大学生とどう違うのか？どういう経験が初期段階に特徴的なのか？このあたりを理解すべきではないか。そこは「仕事に慣れるまで」とくくるよりは、もっと具体的なレベルでくくってもいいのではないか。仕事に慣れていないわけだから、「慣れるまで」は一般的ということになる。「慣れるまでの大変さ」はどこに特徴があったのか。作った概念だけから考えることができる必要がある。このあたりに、M-GTA としての説明力が反映できていないのではないか。基本的スタンスは分析テーマと分析焦点者からデータを見ていけばいいと言い切っているわけであり、分析は分析焦点者の視点に徹しきるべきである。仕事

に慣れるということについて、その人たちにとって何がどうなのか、もっと詰める必要があるだろう。作った概念は、必ず自分の分析テーマのどこかに関係してくる。これが概念を考えたときの基本となる。ここにもっと集中するとオリジナルな結果が得られやすくなる。何がどうしたというところまで、解釈としてつめていきたいわけです。

また、「努力」ということについてだが、「慣れなくてはいけない」と「努力する」は別な話と考えるべきである。「努力」は何をきっかけにしてはじまるのか？「努力しようとするようになる」ためには何が必要なのか？たとえば、慣れない経験をして、これじゃいかんと自分なりに考え改善するという自分があるだろう。つまり、決断し、努力し、何かにつながる。このあたりを見ていく必要がある。作りかけの概念がプロセスのどこかにつながるとしたら、他にも想定される概念がありうる。そのあたりの密度が拡散してしまっている。

コメント2. カテゴリーの形成部分が分類型になってしまっている。ここの分類は有機的に関連づけられているべきで、それにより、何等かのものが、まとまりとなって見えてくるはず。M-GTA的な分析では、データを分析してまとめたら分析が終わりかということそうではない。最終的に自分のたてた、テーマに対して、ひとつの説明モデルまでまとまったものを作り上げていくこと。有機的にまとまりのある説明モデルが大切。M-GTAで分析する人が増えてきているが、この考え方がしっかり理解できていることが大切。カテゴリーと概念が、こういう形でどういう説明ができるのかをさらに検討すべきでしょう。

<フロアからの質問とコメント>

Q1. M-GTAの分析にMAXQDAあまり使わない。特に、ワークシートのデータのバリエーションがそれぞれとても短いことが気になる。どうして使ったのか？

A1. 書き起こしデータをMAXQDAに読み込み、行動を示している部分に着目しながら、コード（概念）を考えていった。バリエーションが短い点については、抜粋となっているためでもある。

コメント1. (木下先生) それはある意味異質な作業で、M-GTAではバリエーションをいくつも比較検討しながら、定義や概念名と何度も見比べ、行きつ戻りつしながら、検討を進めていく必要がある。最初に概念名を決めたところで、てっとり早く関係する箇所を洗い出すという作業になってしまうことが危惧される。

A2. 今回の作業の過程では、一度概念名を決めたあとに、比較検討を進める中で、何度も変更をすることになった。また、概念名がひとつおり出てきたところで、その並び替えを行いながら階層構造的にカテゴリーを作り上げていくイメージになり、その点についてはかなり異質だったと自分でも感じた。最終的にこの資料をまとめつときに、紙上で今一度見直しはした。

コメント2. ヒューマンインターフェース学会でMAXQDAのセミナーではなく、MAXQDAを使ったM-GTAのセミナーがあるということは驚きだ。肝心なところの理解がずれなければいいが、解釈についての自分自身の納得度に反映されてくると思う。

Q3. 行動の変化を知りたいということで分析をしたということだが、M-GTAは内面の変化をとらえるものである。たしかに、気持ちに基づいて行動があるので、実際私も行動の変化に焦点を

あてて概念をつくっていったらいいの？

A3. 研究の目的と分析テーマから、卒業生の職場での行動を記述してみたいという思いで分析が始まっている。そのため行動をとりかかりにし、行動から考え方の特性に行きつけるのではないかと考えてた。実際分析をしていくと、行動を手がかりとすることで、結果的に考え方に結びつく場面が多かった。

コメント3. 行動に着目するということは、とは分析焦点者と他者との相互作用の部分を含むわけであり、行動への着眼はある意味重要。ただ、それだけでいいというわけではなく、今回の場合ならば、行動から仕事の自己イメージへの展開、困難に直面したときに他者がどういうときに、どういうやりとりの中でこの人の経験に何等かの結果をもたらしたのか、というところまで詳細に見ていく必要がある。最終的には行動の側面と内容的な側面の両方があるのが自然。

A4. 質問とコメントがあります。質問は、プロセスの始まりと終わりはなんなのか？最初はどうで最後はどんなのか？ということです。コメントは、「仕事に慣れるまでの努力」という概念については、努力だけではくれないものも多いのではないかと、という点が気になります。もう一度詳細に見ていくと、もう少し違った視点がありそうな気がします。

Q4. プロセスの始まりは就職で、終わりは今の仕事に納得して、その職場で仕事を継続していく意思をもったり、将来の展望を語ったりできるようになる状態と考えています。結果図でいうと下の方です。

A5. 今回の初期キャリア形成というのは、入社3年間までなので、職務経歴は少ないので、仕事に関する自己イメージの蓄積の変容ではないかと理解しました。インタビューのところで業務内容（フェイスシート）、困難への対応（コンピテンシー）、短大教育の効用（FD的な観点）など聞いているようですが、これはどのような意図でしょうか。また、複数の研究者がインタビューをしているようだが、どうやって意識合わせをしたのか？

Q5. もともとの研究が、カリキュラム改善の結果を評価したいというところからきているため、そのような質問を幅広くガイドとして設定した。インタビューデータには多くのことが盛り込まれ、資料にもあるように複数の観点で1つのデータを分析することとなった。共同研究者との意識あわせは、ガイド質問の検討段階からこまめに行っている。

コメント6. 育児をしながら働く女性について、企業の観点から分析をした経験があります。今回出てきた内容は、もう既にわかっていることも多いわけですが、M-GTAですので、さらに踏み込んで、どうしてどうして努力できたのか？どうやって、それを作ったのか？どうやったら、それができたのか？というあたりをもう少し深められたらいいのではないかと。そこを支援していけばいいわけですから。

コメント7. 最終的には、自分が知りたかったことがどの程度把握できたか？ここを確認する必要がある。分析テーマに国際コミュニケーション科とはいっているわけだから、もっと、特色あるところの話、自分の学生という視点を入れてもいいのではないかと。そのことによって、さらに見えてくるものがあると思われる。

＜発表を終えて＞

今回は貴重な機会をいただきましてありがとうございました。今まで談話分析を行ったり、認知科学の基礎理論をベースにしたコード体系による発話データの分類、などの経験をしてきましたが、どうしてもリアリティが表現できず、自分として納得した分析ができずに悩んでいました。質的研究法を正式に取り入れたのは今年度からとなり、ヒューマンインターフェース学会のセミナーに参加しつつ、手探りの状態で今回の分析を進めました。このような状態ではありましたが、木下先生にスーパーバイズいただき、フロアの皆様にも多くのコメントをいただき、懇親会、その後のメールでもご指導をいただき、深く感謝しております。

研究発表をさせていただくことで、分析テーマに含まれる概念の定義、自分の思考プロセスの振り返りと言語化の機会になりました。特に、自分の研究プロセスを他者にわかるように言語化することが、M-GTAの場合重要であることに改めて気づきました。

今回ニュースレターをまとめるために、録音させていただいたものを何度も聞き直し、新たに考えることもできました。さらに浮かんできた疑問もあります。私は概念のレベルでの説明力の大切さをまだ理解できていないのではないかと思います。といいますのは、今回のデータについては、概念が関係づいた結果図の中に、本学科の学生の特徴や強みが表れていると考えていたからです。つまり、個々の概念は一般的ではありますが、プロセスの中に、清泉らしさがあるように考えることもできるわけです。ここのところは、おそらく未熟な考えだと思いますが、次のステップへの問いがまた増えたものとして、さらに検討を進めていきたいと考えております。木下先生、研究会の皆様、今後ともどうぞよろしくご指導ください。

【SV コメント】

木下康仁（立教大学社会学部）

研究会の前に一度発表予定資料を拝見して、いくつかコメントをした。分析テーマにある「キャリア形成」のキャリアの意味など分析に入るにあたっての基本的用語の定義を明確にするよう助言した。それが「形成」されるとは、何が、どのように変化していくプロセスと考えられるか。逆に言うと、この分析で自分が明らかにしようとするのはどのような変化なのかという問いを明確に意識化することにつながるからである。また、インタビューガイドを提示することも促した。何を知るために、どの質問をしたのかを説明することで、データの適切さを判断できるからである。

資料にある分析ワークシートの例についても、ありきたりの感があり、定義の問題点も指摘した。

一通り分析は終わっていて、結果図、ストーリーラインまでまとめられているが、この結果は、分析テーマと分析焦点者からみると、何が明らかにできたと言えるのか。このデータだからわかったこと、地方の短大出身者の特性、ひいては短大、国際コミュニケーション

ョン学科での学び（学生）、教育（教員側）、その経験と、この結果の、どこが、どのように関係しているのか。ここが一番のポイントになるのではないか。

以上がコメントであったが、研究会まで1週間弱で時間的余裕がなかったためと思われるが、前半は基本的用語の意味の明確、ワークシートの概念定義あたりは見直しがされたが、後半の分析に関しては十分な検討の跡は見られなかった。

M-GTA は分析テーマと分析焦点者の視点から、一定の問題意識をもった【研究する人間】が分析を行うものであり、このことの理解がどこまで徹底しているかによって結果は著しく異なったものにもなる。

これは長田報告についてというよりも多くの M-GTA を用いた分析に言えることであり、他の質的研究法にも言えることだが、質的データの分析は、なぜ、ありきたりの結果になってしまうのだろうか。得られたデータをワークシートを使って分析したからといって、それで分析になるわけではない。データがあれば分析はどの方法を用いたとしても、それなりににはできるが、それは理論を生成すること、説明力のあるモデルを生成することは同じではないのである。つまり、データを分析する目的は分析テーマで立てた問いに対する結論を得るためであって、そこで重要となるのが自分自身、すなわち、【研究する人間】の視点となる。

データの深い解釈は分析テーマと分析焦点者の視点によって掘り下げて検討できるのであって、データを字面でみていってもできるわけではない。この点が理解されないままに単に技法面で M-GTA が理解されている危惧を感じたのは、ある学会が M-GTA の学習のためのワークショップを行っているという説明であった。その中でなんとかという質的データ分析ソフトを使っているようで、聞いた限りでの印象では、そのソフトを使えばデータから具体例（バリエーション）が確実に収集でき、確実に分析ワークシートができてしまうと思われた。

分析テーマと分析焦点者、そして、解釈を行う【研究する人間】という3点セットも解釈マシンの肝心な部分が欠落し、もっとも骨の折れる作業が回避されるとすれば、データはそれなりに分析はできてオリジナルな結果は得られないであろう。

データ（インタビュー）を分析することと、分析テーマの結論（GT としての理論生成）を得ることの違いの説明する。一般に前者の傾向が強い。

調査をすることは理論を生成すること ≠ データを分析することだけ。

よくデータがリッチな内容であるかどうか、十分なデータが収集できているかどうかという観点が挙げられるが、一見わかりやすいが現実的には活用しにくい。どうしたらよいかが示されないと。問題はその時にデータに質について考えればよい。

*** 長田さんの発表について**

データ（インタビュー）を分析することと、分析テーマの結論（GT としての理論生成）を得ることの違いの説明する。一般に前者の傾向が強い。

調査をすることは理論を生成すること ≠ データを分析することだけ

・分析焦点者は「女子短大卒業後就職中の者」とする方が良いでしょう。分析焦点者は対象を集団として規定する考え方ですので、通常は一つとしたほうが現実的です。短大出身者で事務職に限定するとか、販売職に限定するとかであれば、そこまで条件設定することになりますが、今回はその違いをどの程度重視するか判断になります。

・分析テーマの「キャリアを形成」の「キャリア」の意味を説明する必要があります。

・ワークシートの例ですが、ありきたりの感があります。まず定義ですが「～こと」をいくつか併記しています。これだと意味がはっきりしません。分析焦点者の視点から見ると、どういう意味になり、それは分析テーマで設定した「初期プロセス」のどこに関係しそうなのかを考え、理論的メモ欄に記入します。独自の解釈が感じられません。具体例を見ると、慣れない「自分」に関係してくる他者がいるようです。上司、2年以上の経験者、・・・つまり、どういう局面で、誰の、どのような関わりが重要なのか、自分なりに仕事ができるようになるにはどんな経験（落ち込み、自信になる、等々）が節目になるのかといった問を入れながら解釈していく必要があります。

・分類型でまとめられていますが、概念からカテゴリーへの作業はどのように行ったかを発表の時に説明してください。基本は概念と概念を個別に比較し関連を見出し、それがカテゴリーになっていくということですが、この場合はどうだったのかと思います。

【第3報告：M-GTAを用いた学術雑誌掲載論文の検討】

「小児がん患児の死に向き合う親の経験」『保健医療社会学論集』第18巻第2号

三輪久美子（日本女子大学人間社会学部）

この論文の内容についてご報告させていただく前に、この論文について少しご説明させていただきたいと思います。この論文は博士論文にとりかかった最初の頃の論文となります。私の博士論文のテーマは、小児がんで子どもを亡くした親の悲嘆（グリーフ）についてであり、子どもの発病時から闘病中、ターミナル期、亡くなった時、亡くなった後からインタビュー時に至るまで、親がどのような内的変化を経験していったのかについての研究です。そうした発病からインタビュー時に至るまでの長い期間のプロセスを扱う研究にとりかかるにあたり、まず子どもが亡くなるまでの闘病中の期間に限定して、そのプロセ

スを分析したものがこの論文です。

なお、この論文を書いたあと、最終的に博士論文としては闘病中と死別後をそれぞれ分けるのではなく、発病からインタビュー時までを一つの一貫したプロセスとして初めから分析し直し、まとめました。そのため、この論文中にある概念の中には、その後の死別後まで含めたプロセスにおいて概念名を変更したものや、新たに追加した概念もあります。そのあたりにつきましても、少し触れさせていただきたいと思います。

【研究の背景】

今や国民の3人に1人ががんで死亡する時代となったが、一般にがん患者というと成人を想定して語られることが多く、患者が子どもである小児がん患児やその家族についての社会的理解は進んでいないのが現状である。

近年、小児がん医療は著しく進歩し、約7割が治癒するといわれるようになったが、その一方で、約3割の完治を望めずに死と向き合わなければならない患児とその家族が存在する。平和でかつ衛生状態や栄養状態が向上した戦後社会においては、子どもが亡くなること自体が非常に稀なことであり、また、自宅で家族を看取ることが少なくなった現代社会において、ある日突然、自分の子どもががんと診断され、迫りくる子どもの死に親が向き合っていくことには大きな困難が伴う。家族構造が変化し、地域とのつながりが希薄化した現代社会においては、こうした親の困難を単に家族の問題として片づけるのではなく、社会の中で患児と親を支えていくことが求められる。

死を前にした小児がん患児とその親に対する援助の必要性は、これまでも患児・家族らと直接接している医療者らによって認識されてきており、医師、看護師、心理士、薬剤師など、それぞれの立場から自分たちが実際に患児やその親に対して行っている援助について、事例を中心とした報告がなされている。また、医療者による援助については、各々の立場からの援助だけではなく、患児・家族を取り巻く他職種間における連携の重要性についても指摘されている。ただし、これらはいずれも医療専門職の立場から、その臨床経験をもとに論じられたものであり、患児や親の立場から論じられたものではない。より良い援助のあり方を模索するためには、まず、当事者自身の立場から、告知以降の闘病と死にどのように向き合っていくのかを知る必要がある。また、これまで小児がん患児の親の研究においては、母親に関するものが中心となっており、父親に関するものはほとんど見られない。

そこで、本研究では、母親と父親が子どものがん告知と死に対してどのように向き合っていくのか、親自身の視点からその経験を明らかにすることを目的とした。

【M-GTAに適した研究であるか】

1. プロセス性を有する研究である

子どもが発病してから亡くなるまでの間（発病～診断確定～ターミナル宣告～死）、

親がどのように目の前の現実を受けとめ、対処しようとし、その過程でどのような内的な変化を経験していったのかという内的変容のプロセスを明らかにしようとするものである。

2. 社会的相互作用に関わる研究である

親の内的な変化のプロセスには、子ども、医療者、周囲の人々など、他者との相互作用が大きな影響を及ぼす。

3. 理論生成をめざす研究である

限定された範囲内において優れた説明力をもつ理論生成をめざす。

【研究テーマ】

「小児がん患児の死に向き合う親の経験」

【分析テーマへの絞り込み】

「親が子どもの小児がん発病から死までの現実に向き合っていくプロセス」

【データの収集法と範囲】

＜データの収集法＞

調査は、財団法人「がんの子どもを守る会」の協力を得て、一人につき1時間半～3時間の個別インタビューを半構造化面接の形で行った。

＜インタビューガイド＞

- ・お子さんの異変に気づいてから診断が確定するまでのことについて
- ・告知の状況について
- ・入院加療が始まってからのことについて
- ・ターミナル宣告について
- ・お子さんが亡くなるまでのことについて
- ・お子さんが亡くなった時のことについて

＜倫理的配慮＞

対象者には事前に調査依頼書を送付していたが、インタビュー時に再度、インタビューの目的、データは研究発表の目的以外には使用しないこと、引用する場合には個人や機関が特定されないようプライバシーには十分配慮すること、インタビュー後であっても随時撤回は可能であること、フィードバックの仕方等について文書で説明し、同意を得た。

インタビュー内容に関しては、許可を得た上で録音した。

＜調査対象者＞

小児がんの子どもの看病を主として自分自身が、あるいは配偶者と同等程度に担い、結果的に子どもを亡くした親

【分析焦点者の設定】

子どもの発病から亡くなるまで子どもの看病を主として自分自身が、あるいは配偶者と同等程度に担った小児がん患児の親 25 名（母親 13 名・父親 12 名）

【ストーリーライン】

突然つきつけられた子どものがん告知は、＜二段階認知＞を経て初めて現実のものとして親の中で意識化される。子どもの死が現実味を帯びた途端に、『どうしてうちの子が』という答えの出ない問いを繰り返すようになり、「自己の傷つき」を経験する。また、医療者主導で始まる治療は＜医療者との葛藤＞をもたらすが、すぐに眼前の現実に対処しなければならないことを自覚し、＜闘病インフラ整備＞を行う。「病気と治療に関する情報収集」、「看病体制の整備」、「精神状態の安定化」という 3 つ側面からの＜闘病インフラ整備＞は、『絶対殺してなるものか』という＜病気克服への決意＞につながる。しかし、その後の懸命な闘病の甲斐なく起こる「病気の進行と治療の限界」は、回復の期待を打ち砕く「制御不能感」をもたらす。しかしながら、辛い治療に耐えている子どもを目の当たりにすると、『子どもが頑張っているんだから』と、再度、＜病気克服への決意＞を新たにし、「希望を持続」させていく。このような＜絶望と希望が交錯＞する状態においては、親は精神状態を安定化させるため、それまで以上に＜社会的関係を極小化＞するようになる一方、医療者も治療が尽きるにつれ、患児と親から次第に遠のいていくという状況が生じる。ここに、子どもの状態が厳しくなればなるほど、能動的にも受動的にも親子の闘病世界はより閉ざされたものになっていく【閉ざされたスパイラル】が形成される。こうした親子だけの閉ざされた空間での「濃密な時間の共有」は、かつて経験したことがないほど＜子どもとの一体感＞を醸成していく反面、迫りつつある死に親子だけで向き合う＜閉塞感＞を深めていく。この【閉ざされたスパイラル】は、“認識・感情”、“行動”、“つながり”という 3 つのディメンションが密接に関連しあう中で形成される。

【ご質問・ご意見】

小倉先生：当事者の研究が少ないということ、当事者視点による研究の意義に関して、研究を通して感じたことはありますか？

A：臨床現場においては、専門家の専門知識と経験は非常に重要だと思いますが、ありのままの対象者や現象を理解しようとする際には、そうした知識や経験がかえって邪魔をしてしまうということも起きる可能性があるのではないかと思います。言い換えれば、知識や経験という専門家メガネを通して現象や対象を理解しようとしてしまうことがあるのではないかと思います。

たとえば、私のこの研究における専門家というのは医療者になりますが、親にもう治療の手立てがなくなったことを告げた時（ターミナルを宣告した時）についての医療者視

点による研究では、ターミナル宣告を親が受けとめたら、親は覚悟を決め、迫りくる子どもの死を受けいれるようになるとされています。そして、医療者は、子どもの死の受容を親に促すことを援助する必要があるとされ、そうした援助にはキューブラー・ロスの5段階理論が有効であるとしている研究もあります。

しかし、その一方で、親の視点からターミナル宣告をされた時の経験を見てみると、「もう治療法がないんだ、どうすることもできないんだ」という子どものクリティカルな病状を受けとめていたとしても、子どもが亡くなることに覚悟を決めるとか、ましてや死を受容するなどということは全くなかったということがわかりました。ターミナルを宣告されていても、ほとんどの親たちは子どもが亡くなった時のことを「本当に突然のことでビックリした」と話していたように、もう手立てがない状態であることは理解していても、それがイコールすぐに亡くなることになるという理解にはなっていなかったことがわかりました。医療者からすると、ターミナルという状態を理解していた親たちが、まさか子どもが亡くなった時に「突然のことでビックリした」と感じていたとは考えてもみなかったのではないかと思います。

このように、時には、専門家の視点による理解というものが、当事者側の経験とは異なっていることもあるのではないかと思います。

そうすると、専門家視点による理解に基づいて行われる援助というものの、当事者が本当に必要としている援助から外れてしまうこともあるのではないかと思います。

フロア：逆の形で、父親が亡くなるということを頭でわかっている、その現実を受けとめられない子どもがいました。

小倉先生：高齢者のターミナルケアの場で研究をしていますが、90歳ぐらいの方がターミナルであることを家族に説明する際、専門家から見ると亡くなるのがあたり前であっても、家族は「死ぬんですか？」と何度も聞くなど、専門家と当事者にはギャップがあることを感じます。当事者の経験をすくいとっていくことが大事なのではないかと思います。

小倉先生：当事者ではない専門家が当事者視点の研究をする限界は？

A：当事者の視点から、その人が眼前の現実をどのように受けとめ、どのように認識したのかということを理解しようとするということについては、やはり、その経験を自分自身がしているわけではないため（たとえ同じような経験をしていても、全く同じ経験をしているということはないので）、その理解には限界があると思います。そうした限界というものをしっかり自覚していることが非常に重要なのではないかと思います。

小倉先生：プロセスを出そうとしているのに、ただ構造だけを並べてしまうことがあります。プロセス性というものについてどのように考えていますか？

A：私が考えるプロセス性というのは、ある現象や対象が変容していくありよう、「うごき」

のことです。

もちろん、その「うごき」の中には、その現象を成り立たせている構造も含まれますが、ある起点から終点までの一定の期間において、その現象や対象が時間の経過の中で、また、他者との様々な相互作用の中で変容していく「うごき」をとらえることが重要であると考えています。

何らかの現象の一場面をポンと切り取って、その現象の構造を明らかにする場合であれば、それは、いわば「静止画」をとらえるようなイメージだと思うのですが、プロセスをとらえようとする M-GTA は、いわば「動画」を分析するようなイメージなのではないかと思います。もちろん、構造を明らかにすることとプロセスを明らかにすること、そのどちらがいいということではなく、自分の研究がどちらに適しているかということを考えることが重要なのだと思います。

また、プロセス性といった場合、これは研究テーマにもよると思いますが、たとえば、子どもを亡くした後までを含めた親のグリーフという私の研究においては、「親が子どもとの絆を再構築していくプロセス」ということがプロセスの核になります。研究で扱ったプロセスの期間というのは、起点が子どもの発病で、終点がインタビュー時ということになりますが、分析を行った結果、子どもとの絆の再構築というものは、インタビューで扱った期間で完結するものではなく、親が一生かかって成し遂げていくものであることが明らかになりました。つまり、このプロセスはインタビューをさせていただいた後も続いていくことが予想され、この研究におけるプロセス性にはその後の継続性も含まれているのではないかと考えています。

小倉先生：援助的に考えると、発病時と闘病中と終末期という時間軸で考える必要はないでしょうか。

A：一つのプロセスの中でも、その時期時期で必要とされる援助は異なってくると思いますので、そのあたりは援助を考える際に必ず考慮に入れたいと思っています。

小倉先生：本や博士論文レベルにおいて闘病中と死別後に分けた理由は？

A：発病から亡くなった後の現在までのデータを分析するにあたっては、発病から死までのプロセスと亡くなった後のプロセスを別々にして分析するべきか、あるいは一貫したプロセスとして扱い分析すべきか、非常に悩みました。

それぞれの方々がとてもたくさんお話しして下さいましたので、25 名分のデータは膨大な量になり、実際、最初はその膨大なデータをどう扱ってよいのか悩み、そこで、まずは発病から死までのプロセスを分析することにしました。それが、今回の論文となりました。

その後、死別後のプロセスの分析を試みたのですが、死別後の親の内的なプロセスには闘病中の経験というものが非常に重要かつ不可欠なものであることが明確になりました。

事故や災害などで子どもが突然亡くなった場合であれば、死を起点にしたプロセスを扱うことができると思いますが、小児がんという病気で亡くした場合、子どもの闘病中の経験が親の死別後の内的経験のプロセスにおいて非常に重要であり、死別前から死別後まで一貫している動きであるため、死別前と死別後は分けて扱うことができないということが明確になり、博士論文では闘病中と死別後を分けずに一貫した一つのプロセスとして分析し、まとめることにしました。

小倉先生：小児がんの場合において、重要であるにもかかわらず困難な相互作用は？

A：最も重要な相互作用というのは親と子どもとの相互作用であると思いますが、小児がんに特徴的な相互作用は（闘病中に限って考えると）、医療者との相互作用になるのではないかと思います。

親にとって最も重要なことは子どもの命を救うことであり、そして、まさに、その子どもの命のカギは医療者が握っているという思いが親にはあります。そのため、自分と医療者との関係が子どもの命にかかわってくると感じているところがあります。つまり、子ども命を担保にした関係であるといえます。

また、自分自身の精神状態を保つため、親は周囲の人たちとの関わりをできるだけもたないようにしているため、医療者の存在はその時の親の人間関係においては非常に大きな部分を占めることにもなります。

このように、親にとって医療者との関係は非常に重要なのですが、その反面、非常に困難な関係にもなってきます。というのは、最初から親は医療者を頼っていますが、子どもの容体が悪化すればするほど、「何とか助けてほしい」という医療者への依存の気持ちはより一層強くなっていきます。ところが、子どもの容体が悪化し、もう救う手立てがなくなってくると（つまりターミナルの状態になると）、多くの場合、医療者は親から離れていくということが生じていました。そのことを親は非常に敏感に感じ、医療者に対してどんどん不安や不信感を募らせていくことになるのですが、その一方で、命を救ってもらいたい、すがりたいという気持ちも大きくなります。このように、親と医療者との関係は非常に重要であると同時に、時に非常に困難を伴う関係になることがわかりました。

小倉先生：こういう主従関係というものについて他のことにもあるのではないかと思います。

小倉先生：結果図の中の3つのディメンションとは？

A：この3つのディメンションというのは、他のGTAでいうディメンションではなく、何らかの認識があって何かの行動につながるというように、認識と行動は密着に関係していることから、自分の中で各概念がどのように関係しているのかを確認していくために記しました。

小倉先生：プロセスの中で大事なところは？

A：「閉ざされたスパイラル」というものをコアカテゴリーにしていますが、その中での「子どもとの一体感」というものが非常に大事で、閉ざされた中にあるからこそ子どもとの一体感がどんどん強くなるということがあります。また、それと同時に、その一体感は閉塞感とともに病院という特殊な環境下での孤立感というものも伴うことになりませんが、こうした一体感こそが親が子どもとともに闘っていくことを支えていくものであるということがわかりました。

小倉先生：たとえば、高齢者の介護などにおいても一体感をもつものなののでしょうか？

フロア：以前に高齢者介護の研究をしたのですが、一体感をもつ人ともたない人がいて、それは過去の人間関係が影響しているというのが私の研究結果でした。一体感をもちたいと思っているご夫婦もいれば、第三者の介護者がいないとできないと思っているご夫婦もいて、高齢者は長い間生きている分、子どもとは違った相互作用があるのではないかと考えています。

A：今の高齢者介護のお話をうかがって少し思ったのですが、大人のがん闘病の場合は、その人自身が引き受けていく、その人の経験ですが、幼い子どもががん闘病する経験というのは、もちろん、その子どもが闘病を引き受けていくものの、それは同時に親が子どもにがん闘病をさせる経験でもあるという、親の経験でもあると考えられると思います。親が治療を選択し、決定し、その結果は親が引き受けていくことにもなります。こうしたことから、大人の患者の介護をするのと幼い子どもの介護をするのでは、一体感というものが違ってくるのではないかと感じます。

小倉先生：ペットの場合などは、いかがでしょうか？

フロア：今回の研究のプロセスがペットの闘病の場合と重なることが非常に多いと感じました。子どもであれば少しは意思表示ができるかもしれませんが、ペットの場合は、治療の選択など全てが飼い主の責任になるので、一体感と、こういう治療をさせるという罪悪感も強いと思います。ただ、治療がうまくいかなかった時に、医療者が離れていくということや、医療者に対する不信感などはないように思います。

小倉先生：「閉ざされたスパイラル」ということは、たとえば不妊治療などにおいてもないのでしょうか？

フロア：なかなか子どもが得られにくくなった年代の人たちの不妊治療の場合においては、暗黙の主従関係の中で逆に依存するほうが楽だということで治療をやめられないスパイラルに陥っていくことがあります。逆に自分で決められないことを医師に決めてほしいという形で意思決定の委譲ということが生じています。

フロア：「暗黙の主従関係」というのは、小児がんで特徴的な概念というよりも他のことにも見られるのではないかと思います、「子どもとの一体感」というのは特徴的に顕著に出ている概念ではないかと思いました。それから、今のインターネットが発達した時代では、自分で治療の知識を得ていき、それを武器に医者に対抗していくということはないのでしょうか。また、医療者というのは医師と看護師の両方を含んでいるのでしょうか。

A：確かに小児がん患児の特徴的な概念としては、「子どもとの一体感」ということになると思います。親御さんたちは、告知時には全く何の知識もない状態で、そこから自分自身で本やインターネットなどを通して知識を獲得していくということがありました。そうした中で、父親たちの中には医師に対して自分から提案をしていく方もありましたが、母親たちにはあまり見られませんでした。親が自分で知識を得たあとに自ら治療を提案したり決定したりしていくことが少なかった理由としては、それがそのまま子どもの命を左右してしまうことになり、それを親御さんたちは非常に恐れていたということが考えられるのではないかと思います。医療者というのは、具体的には医師と看護師の両方を指しています。

フロア：「暗黙の主従関係」という概念について、これは固定的ではないと思うのですが、関係がどう動いたのかということについて表現できる可能性はないのでしょうか。

A：もちろん「暗黙の主従関係」というのは、最初はこうした状態から始まってはいるものの、これが決して固定化されたものではなく、その中で親たちもいろいろな対処をしようとし、また、子どもの容体の変化にもよって関係がかわってくるころがあります。特にターミナル期になると親の医療者に対する依存も大きくなっていく一方で、医療者が離れていくということもありますので、そうした関係の動的なうごきというものも表現できればと思っています。

フロア：長い闘病を通して結局亡くなる場合、その間に医療者との信頼をつくり上げていくこともあるのではないのでしょうか。医師や看護師に対して「よくやってくれた」という信頼性も生まれているのではないかと。医療者の名誉のためにひと言、言わせていただきました。

小倉先生：M-GTA を用いて得られた援助的な意義は？

A：親御さんたちの語りの中に「どん底」という言葉が出てきたのですが、「どん底」の経験をした人たちが、時間の経過というものだけではなく、さまざまな出会いや気づき、相互作用によって変容していく一連のプロセスというものを明らかにしていったことによって、私自身、人間の変化の可能性や、本来人間がもっている強さのようなものを改めて感じました。これは、M-GTA を用いたことで、動的なプロセス、つまり、人間の変容していくありさまをつぶさにとらえることができたからなのではないかと思います。

そして、このような変容していく一連のプロセスを知ることができると、援助を考えていく際、そうした変化の可能性というものを視野に入れた、長期的な視点による援助の組み立てが可能になるのではないかと思います。

私の研究では、一連のプロセスにおいて、時期によって対象者が必要とする援助の内容や援助の担い手も変わっていくことがわかりました。適切な時期に適切な担い手によって適切な援助が提供されること、そうしたきめ細かい援助を組み立てるためには、M-GTAは非常に有効ではないかと思います。

小倉先生：博士論文にまとめた時に変更した概念などは？

A：たとえば、「子どもとの一体感」という概念を「一体感の醸成」という概念名に変更しました。死別後、親は亡くなった子どもとの新たな一体感をつくりあげていくということがあります、それを「新たな一体感の獲得」として概念名をつけましたが、この死別後の一体感は、生前の子どもとの一体感と同じものではなく新たな一体感であり、親自らが主体的に獲得していく一体感であることがわかりました。それに対して、闘病中の子どもとの一体感は、子どもと一緒にあってともに闘っていく中で、おのずから醸成されていく一体感であるということがわかり、闘病中は「一体感の醸成」、死別後は「新たな一体感の獲得」ということで概念名をつけました。

また、「一体感の醸成」という概念の上位概念として「ともに闘う」という概念を新たに生成しました。これは、死別後の「ともに生きる」という概念に呼応するものです。この「一体感の醸成」を内包した「ともに闘う」という概念は、亡くなった後の親の内的プロセスにおいて非常に重要な意味をもつため、とても大事な概念であると考えています。

さらに、闘病中のプロセスにおいて新たに生成した概念の一つとして、「感情の棚上げ」という概念があります。これは、子どもの病気に対する不安や子どもをかわいそうだと思ったりするさまざまな感情を一旦棚上げした状態にすることです。親が子どもとともに闘っていくためには、さまざまな感情を一旦棚上げ状態にしないと闘っていくことはできないということが非常に明確になりました。この「感情の棚上げ」という概念は「ともに闘う」ことを支える意味でも重要な概念になっていると考えています。

小倉先生：今回の研究を材料に、結果を共有し合いながらお互いに分析を深めていければと考えています。お互いに M-GTA で書かれた論文を引用することは少ないと思いますので、それぞれの研究成果を自分の研究の中に生かしていければと思います、今回こういう企画をしました。

【木下先生コメントまとめ】

・ M-GTA を使った個別な研究から、さらに理論的にも内容的にも発展させていくにはどの

ようにしたらよいのかということですが、小児がん患児をめぐる M-GTA を使った研究をいくつかあわせて検討することで、何か新しい個別ではないものが見いだせるのでは。一つは、テーマで広げていくことから始めていけばよいのではないのでしょうか。同じテーマに関して、ある程度まとめて検討できるようなことも。もう一つは、今回見られた特徴は他の場合にも見られるのではないかという、現象特性などを考えてみてはどうでしょうか。

- ・時間の流れにそって分析がまとめられるかという、分析テーマによりますが、人間の経験というのはそんなにきれいな時間的な流れによってまとめられることではないんですね。ただ、一方で現実が変化していくところと関連した分析でなければ説明力をもたないということです。人間の経験というのは単線的にいくだけではなくて、くるくる回ることもありますし、しかし、回り続けることもなくて、そこから違った局面に移行するとかっていう、そういう変化もあるわけです。そうすると、図で考えた時に、左から右へみたいな矢印にすべてが吸収できるわけではなくて、もっと立体的に動いていく部分っていうのも出てきて、それをどう図で表現するかっていうのは難しい話なんですけど、工夫のし甲斐がある部分だと思います。ひと言でいえば、分析テーマで明らかにしようとするプロセスが自分にとってどういうプロセスかっていうことに尽きるのですが、でも実際上は現実のうごきと自分の分析テーマのプロセスとは何らかの形では関連します。ですから、あまり窮屈に時間的な経過の中で一直線的なものとしてプロセスを考える必要はないということです。
- ・領域密着型理論とフォーマル理論というのがありますが、個別的な研究を超えたところで生成した概念や説明モデルとしてのグラウンデッド・セオリーがどのくらい成立し得るか。フォーマル理論まではともかくとして領域密着型理論として守備範囲を考えれば、今日の議論の中でも可能性を感じるが多々あったように思います。ヒューマンサービスというくくりに入るのかもしれませんが。そういう意味では、個別的な研究を超えて成立し得る、もしかしたら、これは理論というよりも概念、そういう大きな説明力をもった概念。個別の研究で提案された概念が、ものによってはかなり広い範囲で成立し得るかもしれない。そういう概念が増えていけば、そこでまた化学反応みたいなものが起きていくのかもしれない。たぶん、そういう方向に少しずつ開いていくことができそうな、そんな予感を今日のやりとりを聞きながら感じました。また、そういう課題も研究会でも立てていけるかなと思っています。

【発表を終えての感想】

今回、小倉先生よりご提案の新しい企画に取り上げていただき、どうもありがとうございました。この論文は、私がまだ M-GTA を勉強し始めた頃に初めて M-GTA を用いて書いた論文で、改めて読み返してみますと手直ししたい箇所なども散見され、今回の企画の材料として使っていただくことに少し躊躇するところもありました。ただ、これまで研究会

において違うテーマを各自が自分の研究テーマにひきつけて考えてみるという機会はありませんでしたので、そういう機会になればと思い、素材として提供させていただきました。研究テーマや研究領域が異なっても、同じヒューマンサービス領域で研究をされている皆さまの間で何か共有できるものを見つけていただくことができましたら嬉しく思います。

小倉先生もおっしゃっておられましたが、論文を執筆する際に引用したり参考にする文献は自分の研究テーマに関連した文献が多く、他の研究テーマにまで目を向けることは少ないように思います。今回の企画のような機会においては、これまで自分の研究テーマとは重なる部分がないと思っていた他のテーマに関する研究であっても、そこから自分の研究の分析に応用可能なヒントを得られることもあるのではないかと思います。小倉先生の以前のご研究の中に「素材スパーク体験」という概念がありましたが、個別の研究が参加者にとって何らかのスパーク体験の素材になるような機会が今後あればと思っています。

今回、皆さまから貴重なご意見をいただき、私自身、自分の過去の研究を振り返ることができましたとともに、これから研究を続けていく上でのたくさんの考える視点もいただきました。どうもありがとうございました。

【コーディネーター・司会】

小倉啓子（ヤマザキ学園大学動物看護学部）

1. 趣旨

今回は、新しい試みをしました。趣旨は、M-GTAによる論文で生成された概念やカテゴリ一、発見されたプロセスや現象特性を検討することで、自分の研究や分析のヒントや気づきを得たり、思考を活性化させたり出来るのではないかとということからでした。

M-GTAを用いた研究のほとんどはヒューマン・ケアサービスの領域での相互作用、援助関係に着目し、援助的な知見を得ようとする姿勢をとっています。ですから、そこで見出された概念やプロセス、現象特性には共通点が多いと思われます。反対に重なる点が少なく、むしろ相違点が多い場合には、同じヒューマン・ケアサービスであっても各領域の特性が明らかになり、テーマや解釈、「研究する人間」の独自性がより明確になるでしょう。つまり、データ分析における継続的比較分析と同様なことをM-GTA論文間でも行って、類似点・相違点・対極点を見出すことによって、思考を活性化させ、自分の研究に役立てることが出来るのではないかとことです。M-GTA研究結果は現場で応用され修正されるというプロセス性をもっていますので、現場での応用による検証だけでなく、他の研究による応用、修正による検証も可能ではないかと考えます。

このような論文間の検討や活用を進めると、次の段階として、M-GTAによる研究がこれまでヒューマン・ケア領域にどのような新しい視点・理論を提起してきたのか、少し大きな

枠組みで捉えられるのではないかと思います。M-GTA を用いた多くの論文がありますが、それぞれが概念、カテゴリーを生成し続けていくだけですと、言葉や概念がバラバラに大量生産されていくような気がします。

以上のような趣旨による試みですので、論議の資料として会員の三輪さんをお願いして「小児がん患児の死に向き合う親の経験」(『保健医療社会学論集』第18巻第2号)の概念やプロセスの説明などをしていただきました。この論文で生成された概念やカテゴリー、プロセスと参加者のテーマや研究結果との関連などについて検討していただけたら、ということでした。この論文を選択した理由は、援助者—被援助者の力関係、病・闘病・死、思いがけない出来事との遭遇、医療者と家族、患者である子どもとの相互作用、援助の場などがM-GTA メンバーのテーマやデータと共通点があり、活発な論議が期待されると考えたからです。また、この試みの提案者である小倉の研究テーマや分析結果と類似している反面、対極的な相互作用もあるので大変参考になったということがあります。セッションでは発表者三輪さんは検討の資料提供者、小倉やスーパーバイザーではなく検討の司会者という役割という設定でした。

2. セッション

三輪さんに簡略に研究目的・方法・分析テーマへの絞り込み、結果図とストーリーラインの説明をしていただきました。概念2例のワークシート、概念とカテゴリーの関係の説明がありました。

親の体験の分析結果は、医療者にとって厳しいもので、納得しがたい面もあるのではないかと、私は想像しました。フロアから医療者の立場からのコメントがあり、親と医療者とでは同じ出来事の意味づけがこんなにも違うことを知ることが出来ました。概念『不信と依存の葛藤』に関して、援助者への不信があっても「子どもへの対応が悪くなつては」と援助者にモノが言えない親の体験と類似した例のコメントがあり、セッションが終わってから「子どものいじめの問題でも同じことがある」との話がありました。援助者に不満や不信を抱いても、援助者に頼らざるを得ない場面は多くの援助場面でみられることと思われれます。『不信と依存の葛藤』のなかにも領域による微かな違いがあり、領域やデータ特有の『不信と依存の葛藤』があるのではないかと思われれます。例えば、私が分析中の施設入居の高齢者ターミナルケアの場面では職員は家族の協力と理解を得たいが家族に遠慮して言えない、家族は親が世話になっているから職員に遠慮して言えないという互いに遠慮し警戒し合う関係がみられ、医療者に対する小児ガン家族の『不信と依存の葛藤』とは違った様相になっていました。こうしたわずかな検討から、被援助者が経験する『不信と依存の葛藤』と援助者が経験する『不信と依存の葛藤』の違いや領域による『不信と依存の葛藤』の違いがあることがわかり、領域密着型研究の重要性が再確認出来ます。

しかし、施設と病院、在宅での『不信と依存の葛藤』に共通する相互作用は何かを検討することも出来るように思われれます。また、三輪さんの分析では、『社会関係の縮小化』、『閉ざされたスパイラル』は闘病に専念する戦略でもあるとのことですが、成人の闘病患者・

家族の場合は『社会関係の縮小化』は生じないでしょうか。学校や職場ではどうでしょうか。具体的には多様な形を取っていても、そこに通底する動き、現象特性として何かがあって、それを捉えることも出来るように思います。あまり具体的データから離れて抽象化してはGTAの意義を失いかねませんが。

今回は参加者からの発言が少なかったことから考えると、参加者の領域やテーマと重なる点が少なく、関係のない論議と感じられた方が多かったように思います。それ以上に、進行や司会のまずさもあって、フロアの皆さまは何を発言して良いのかが不明確で戸惑われたように思いました。

木下先生が言われたように、概念レベルでの共有性を探すことは出来るのではないかとありますが、ご自分のM-GTA研究と他のM-GTA研究との関連を検討することが必要か、有用かどうか、今後の課題にしたいと思います。お忙しいなか、資料としてご研究のまとめを作って下さった三輪さんのご尽力に深く感謝申し上げます。また、今回の試みに関心を持って参加して下さいました会員の皆さまに感謝申し上げます。

◇編集後記

2012年度も押し詰まって、皆様、お忙しいことと思います。今回の研究会では会長の小倉先生と三輪さんによる新しい試みは、大変勉強になり、今後もこのように皆様の役に立つメニューを盛り込んだ研究会にしていきたいと思います。会員の皆様も、ぜひ、ご意見をお送りください。会員の皆様とともに、皆様のための会になることがこのM-GTA研究会の趣旨だと思っています。よろしくお願いいたします。(林)